発掘された鈴鹿 1989

発掘調査概報・概要集

2003

鈴鹿市考古博物館

例言

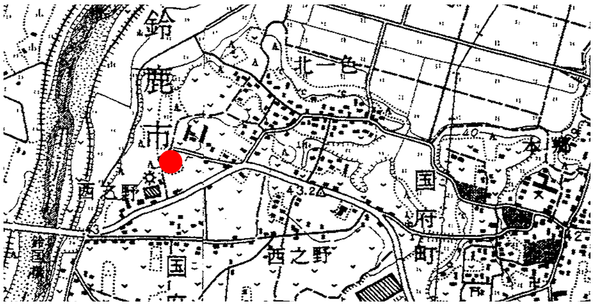
1. 本書は，鈴鹿市教育委員会が平成元 (1989) 年に実施した発掘調査の成果を紹介するものです。
2. 調査原因およびその主体，調査期間，調査面積，調査主体および担当者はそれぞれの文頭に記載しました。
3. 保子里遺跡・保子里古墳群・岡田遺跡については発掘調査概要報告を兼ねています。
4. 上記の遺跡についての見解・評価はあくまで現時点のもので、最終的な報告書において訂正される可能性があります。
5. その他の遺跡についてはすでに本・概要報告書が刊行されていますので詳細については参考文献をご参照ください。
6. 調査位置図には国土地理院発行の 1/25,000 地形図「鈴鹿」「亀山」「白子」の一部を使用しています。
7. 本書の執筆・編集は鈴鹿市考古博物館埋蔵文化財グループ　藤原秀樹が担当しました。
8. 本書は PDF による WEB 上の刊行物です。モニターで見ることを前提に最適化しています。
9. ご利用に際しましては必ず最新版をダウンロードしてください。
10. 調査にかかる記録および出土遺物はすべて鈴鹿市考古博物館において保管しています。

目次

保子里遺跡・古墳群……………………………………… 1
津賀平遺跡……………………………………………… 12
岡田遺跡………………………………………………… 14
伊勢国分寺跡（２次）………………………………… 17
石塚遺跡・乙部遺跡・大坂古墳……………………… 19
中尾山遺跡……………………………………………… 21
報告書抄録……………………………………………… 22

保子里遺跡・古墳群 Hokori site, Hokori tumulus

所在地　鈴鹿市国府町字井口・保子里
事業主体　株式会社ホンダエクスプレス
調査目的　モータープール造成に先立つ埋蔵文化財の記録保存
調査期間　平成元年５月 22 日～６月７日
調査面積　350 ㎡
調査主体　鈴鹿市遺跡調査会
調査担当　藤原秀樹・新田　剛



保子里遺跡･古墳群調査位置図 (1/25,000)

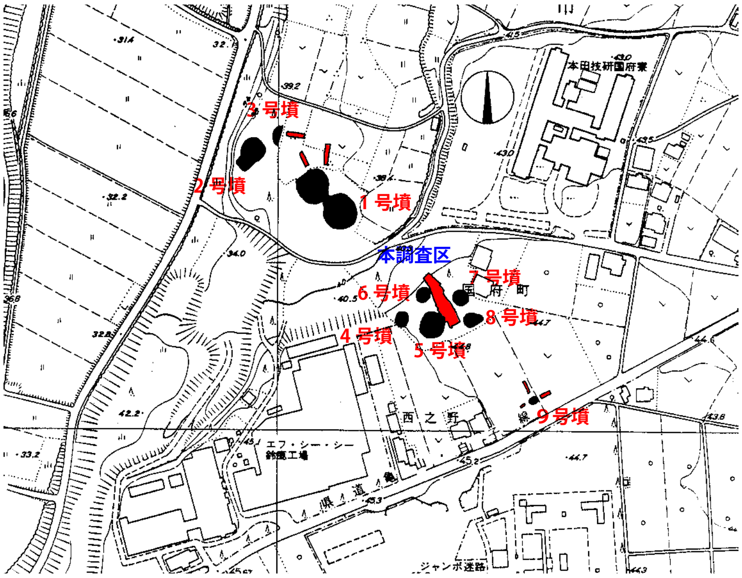
はじめに

保子里(ほこり)遺跡・古墳群は，鈴鹿川右岸の中位段丘上に立地しています。標高はおよそ 40 ～ 45 mで，鈴鹿川の谷底平野とは８mほどの比高差があります。保子里古墳群は 18 基からなります。主墳ともいえる１号墳は２つの円丘が連接する双円墳 (全長 50 m) とされています。西側の墳丘が明治 32 年に発掘されて，２基の石棺が見つかり，その内部と周辺から垂飾付耳飾・環頭大刀・銀象嵌把頭(そうがんつかがしら)大刀・銅承台(しょうだい)付鋺など多数の遺物が出土しています。

保子里 14・13・18 号墳は，それぞれ昭和 35・37・38 年に発掘調査されています。13 号墳は径 10 m，高さ 0.6 m，14 号墳は径 11 m，高さ 1.4 mのいずれも円墳で盗掘を受けていましたが，主体部は木棺直葬と見られます。13 号墳は墳丘から，14 号墳では墳丘裾から円筒埴輪棺も検出されています。18 号墳は直径 13.3 mと推定され，市内では珍しく横穴式石室を主体とする古墳でした。

保子里遺跡は，保子里古墳群から北に向かって舌状に伸びる段丘上に位置します。分布調査により新たに存在が確認されました。また，保子里遺跡・古墳群から小さな谷を挟んで東側には北一色遺跡が位置します。縄文の石器の散布地として知られていました。昭和 43 年に一部が発掘調査され，縄文時代中期末から後期初頭の住居跡，晩期の土器棺墓，弥生時代後期の住居跡等が検出されています。

調査は，古墳周辺の段丘上を造成してモータープールとする事業に先立つものです。事前協議の結果，まず進入用の道路が５～８号墳の間を縫うように通るため，この部分については影響が避けられず本調査を行うことになりました。さらに，現存する古墳の墳丘は現状保存し，１・３・９号墳は将来の保護を考え周溝の範囲確認のトレンチ調査を行うことになりました。



保子里遺跡･古墳群調査区配置図 (1/5,000)

調査の結果

本調査区　道路の形状に合せた南北方向の幅 9 m，延長 40 mの調査区です。予想された 5・8 号墳の周溝は調査区の一部に一端をあらわしたのみでしたが，土壙墓が 11 基検出されました。

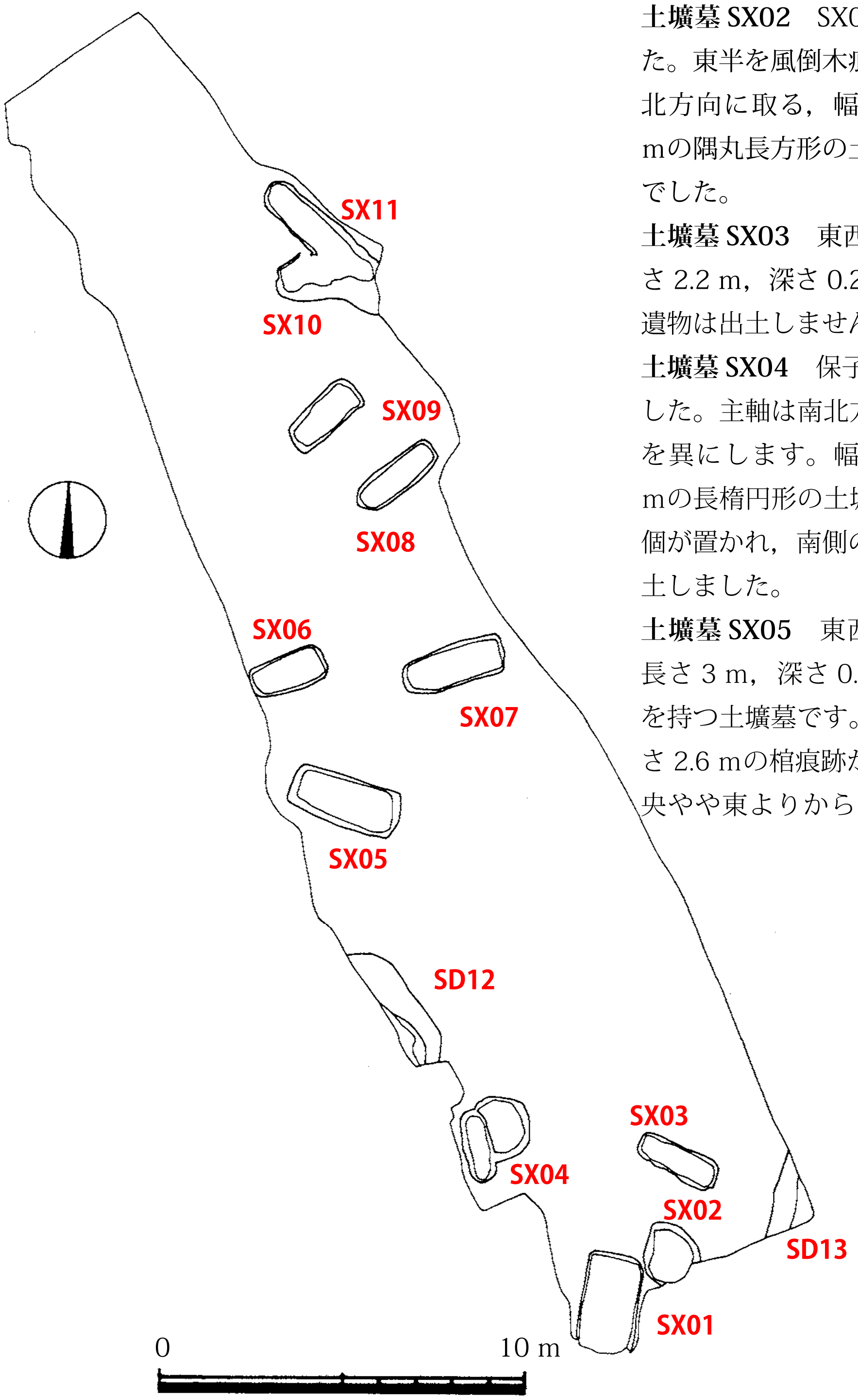
土壙墓 SX01　調査区の南端で検出されました。主軸を南北方向に取る，幅 1.6 mと他と比べて幅広で，長さ 2.8 m，検出面から底面までの深さ (以下「深さ」)0.5 mの長方形の土壙墓です。南西隅に須恵器坏身 1 個と坏蓋 3 個が置かれ，坏蓋のうち 1 個は伏せて 2 個は口縁を上向きにされていました。中央やや南よりからは土師器壺と鉄刀子が出土しました。南半西寄りからは須恵器坏・横瓶・甕・壺甕切り屑焼成品が破砕され撒かれたような状態で出土しました。また，北壁際からは赤色顔料が検出されました。

土壙墓 SX02　SX01 の北東に接して検出されました。東半を風倒木痕に破壊されています。主軸を南北方向に取る，幅 0.8 m，長さ 1.8 m，深さ 0.35 mの隅丸長方形の土壙墓です。遺物は出土しませんでした。

土壙墓 SX03　東西方向に主軸をとる幅 0.8 m，長さ 2.2 m，深さ 0.25 mの隅丸長方形の土壙墓です。遺物は出土しませんでした。

土壙墓 SX04　保子里 5 号墳の墳丘裾で検出されました。主軸は南北方向ですが，SX01・02 とは振れを異にします。幅 0.7 m，長さ 1.95 m，深さ 0.4 mの長楕円形の土壙墓です。南東隅に須恵器坏身 1 個が置かれ，南側の西壁際から須恵質の紡錘車が出土しました。

土壙墓 SX05　東西方向に主軸をとる，幅 1.3 m，長さ 3 m，深さ 0.7 mと最もしっかりした掘り方を持つ土壙墓です。床面南壁に寄って幅 0.7 m，長さ 2.6 mの棺痕跡が認められます。棺痕跡北辺の中央やや東よりから 9 本の鉄鏃が切っ先を西に向け



遺構配置図 (1/200)

まとまって出土しました。

土壙墓 SX06　SX05 とほぼ同じ東西方向に主軸をとる，幅 1.1 m，長さ 2.8 m，深さ 0.4 mの土壙墓です。床面には幅 0.6 m，長さ 2.6 mの棺痕跡が検出されました。棺痕跡の中央に土師器壺が，やや西よりに須恵器坏蓋 2 個と坏身 2 個が，口縁を上に向け組み合わせて置かれていました。棺外の掘り方北西隅にも須恵器坏蓋 1 個が伏せて置かれていました。

土壙墓 SX07　主軸は SX06 とほぼ同じの東西方向で，幅 1.0 m，長さ 2.1 m，深さ 0.3 mの土壙墓です。遺物は出土しませんでした。

土壙墓 SX08　主軸は北東 - 南西方向で，幅 0.9 m，長さ 2.6 m，深さ 0.4 mの土壙墓です。北東よりから須恵器坏蓋 1 個が，中央やや東よりから坏身 1 個が出土しましたがいずれも完形ではありません。

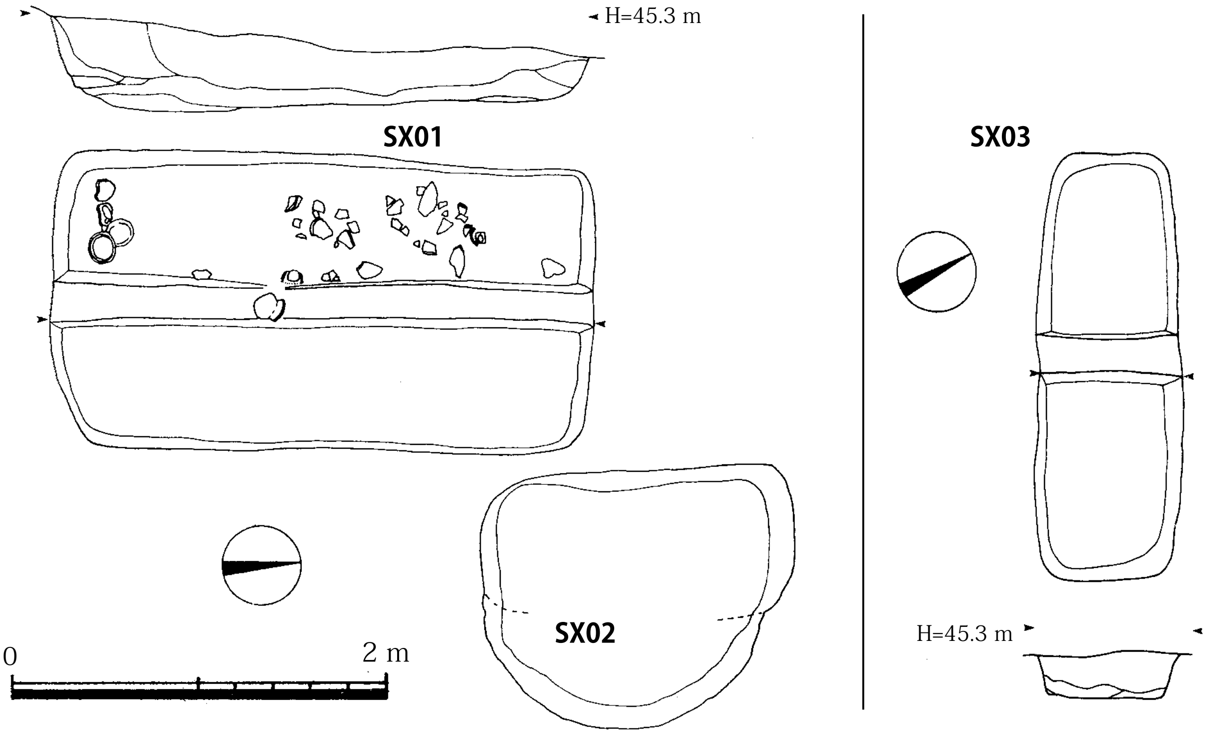
土壙墓 SX09　SX08 の北西側に並行するように位置します。幅 0.9 m，長さ 2.2 m，深さ 0.4 mの土壙墓です。床面に幅 0.5 mの棺痕跡が確認できます。棺痕跡の北辺付近から須恵器坏身 1 個と鉄刀子 1 点が出土しました。

土壙墓 SX10　SX11 に切りあっていますが，風倒木痕で大きく撹乱されているため新旧関係は不明です。主軸は北東 - 南西方向で，幅およそ 0.8 m，長さ 1.3 m，深さ 0.4 mの土壙墓です。出土遺物はありませんが，南西壁際から板状の石が出土しています。

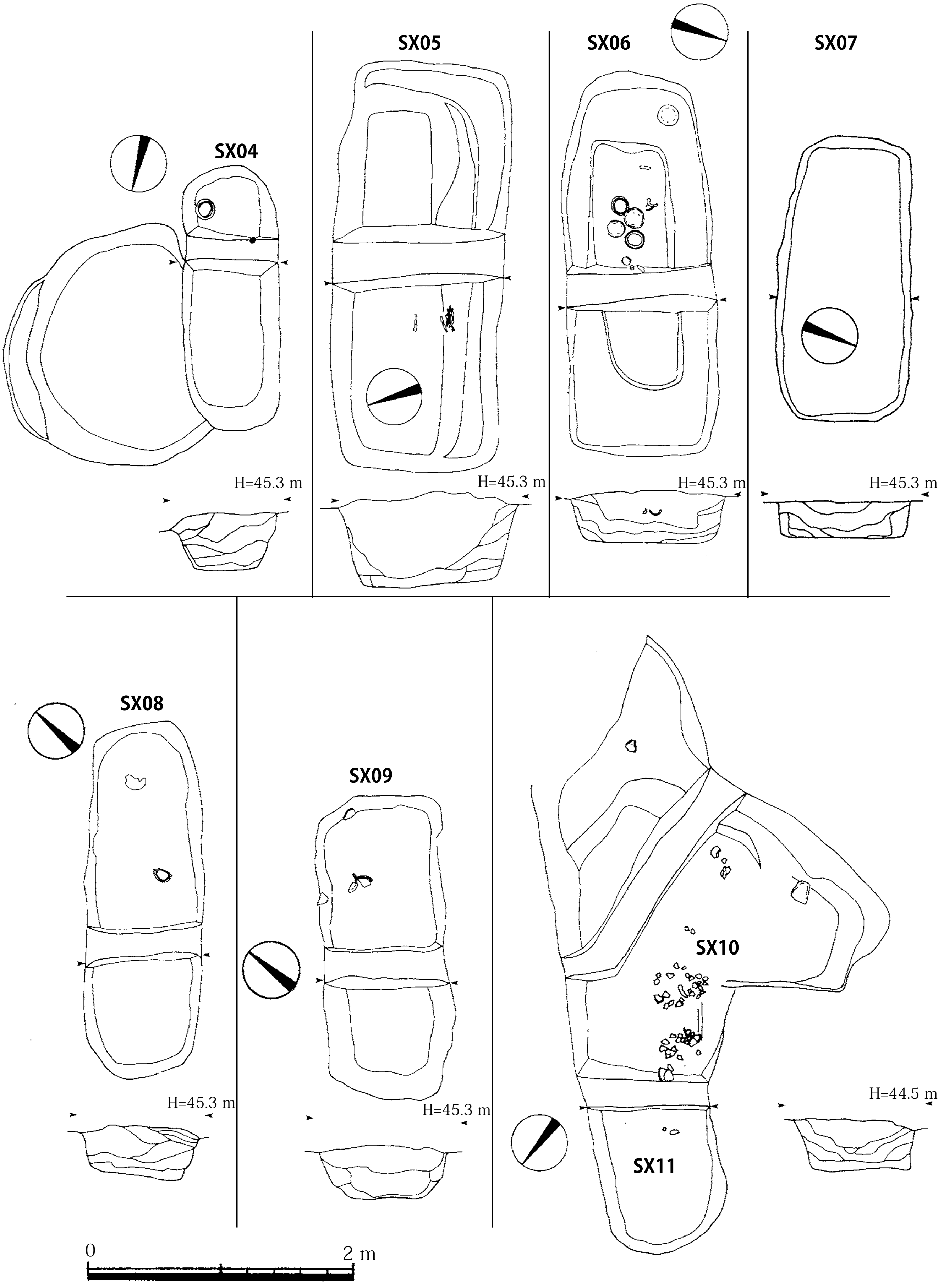
土壙墓 SX11　SX10 と切りあっています。主軸は北西 - 南東方向で，幅 0.9 m，長さ不明で，深さ 0.4 mの土壙墓です。南東やや西よりから須恵器坏身と短頸壺が破砕された状態で出土しました。

周溝 SD12　保子里 5 号墳の周溝です。調査区の関係で外辺のみ検出しました。周溝の深さは約 0.6 mです。肩は弧状をしていて，方墳である 5 号墳の周溝のコーナー部に当たるものと見られます。遺物は土師器の細片が出土したのみです。

周溝 SD13　保子里 8 号墳の周溝です。調査区の関係で外辺のみ検出しました。周溝の深さは約 0.6 mです。肩は直線状で，遺跡地図等では円墳とされている 8 号墳も方墳である可能性が高いと見られます。遺物は出土しませんでした。



SX01 ～ SX03 遺構実測図 (1/40)



SX04 ～ SX11 遺構実測図 (1/40)

保子里１号墳　保子里１号墳の周囲には周溝の痕跡を示す窪地や水田の畦が残存していて，これは墳丘と一体として保存されることになりました。しかし，北側については平坦に整地された畑が墳丘裾まで迫っていて，周溝の有無が不明でした。そこで，この畑地に２条のトレンチを設定して調査を行いました。

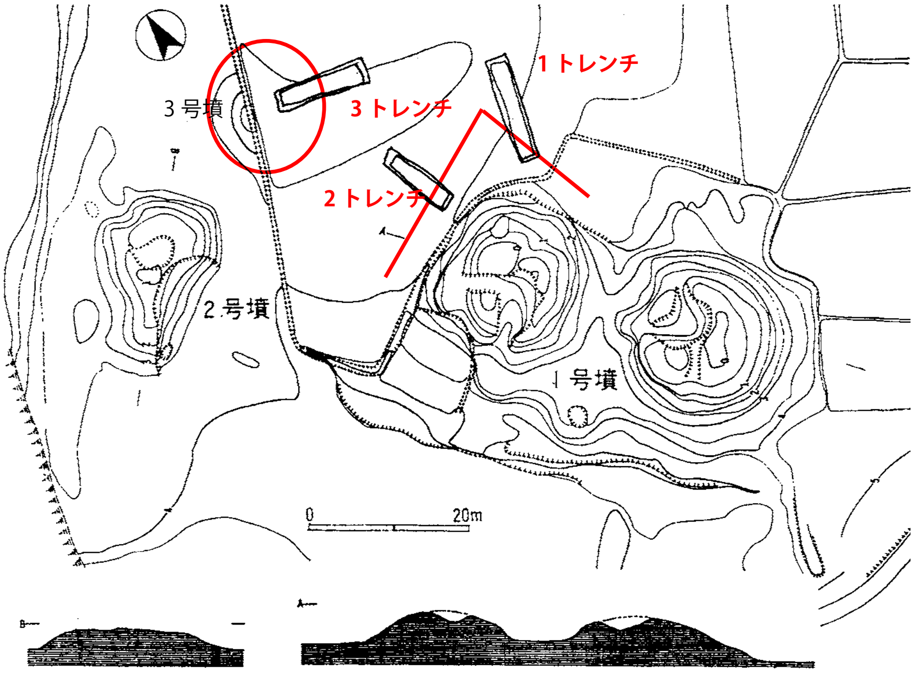
周溝 SD14　１号墳東墳の北端から北方向に設定した１トレンチを，１トレンチから西に 10 m離れて北西方向に設定した２トレンチのいずれからも周溝 SD14 を検出しました。SD14 は現存の墳丘裾から４m以上離れて検出され，東墳の裾がかなり削平され，変形していることが伺えます。２トレンチにおける SD14 は幅 5.6 m，検出面からの深さ 0.6 mを測ります。溝の両肩はほぼ平行で , 墳丘と並行します。これに対し１トレンチでは，SD14 の内側の肩は２トレンチでの内肩とはほぼ直交し，外溝は緩やかなカーブをなして外に膨らんでいます。幅は広がっており約７m，深さは検出面からの深さ 0.6 mを測ります。

SD14 の埋土は，上層から①耕作土，②～⑥開墾時の埋め立て土，⑦自然堆積の黒色土，⑧～⑩築造直後の流入土となります。⑧～⑩層には葺石に用いられたと思われる５～ 20cm の円礫が多数混入し , また多くの円筒・朝顔形埴輪の破片と，若干の須恵器片が出土しました。

埴輪はほとんどが細片で , 復元できる個体はありませんでした。無黒班で，橙色土師質を呈するものが大部分を占め，暗紫色須恵質のものが少数あります。外面調整は，ハケ目原体を横方向に断続的に動かす B-2 種ヨコハケですが , 突帯の断面は低くつぶれたM字状でかなり退化した様子が伺えます。底部の破片は無く , この地域に多い淡輪（たんのわ）技法が採用されているか否かは確認できませんでした。

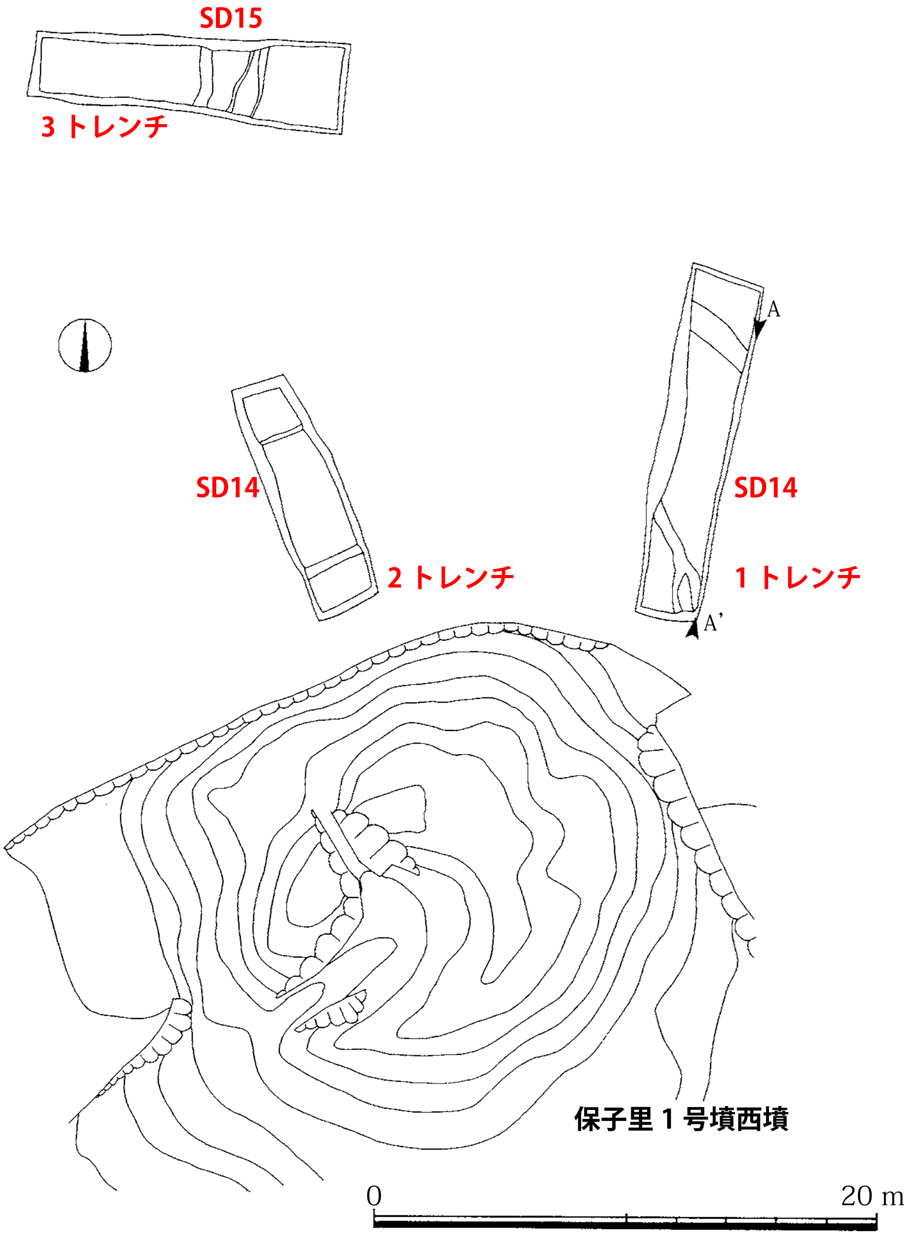
保子里３号墳　１号墳北側の工事対象外の山林内に所在します。大半を畑の造成によって削平され，墳丘西端が弓状に残っているのみです。周溝が工事対象地内に及ぶと推定されたため，規模確認のため東西方向の３トレンチを設定しました。

周溝 SD15　残存する墳丘から約９m離れた地点で検出しました。SD15 の幅は 2.6 m，深さは 0.2 mで，かなり削平を受けていることがうかがえます。また，わずかに弧を描くことから，３号墳は直径 15 mあまりの円墳と考えられます。検出時に包含層から鉄鏃１点が出土し，このことからも主体部はすでに破壊されている可能性が高いと見られます。

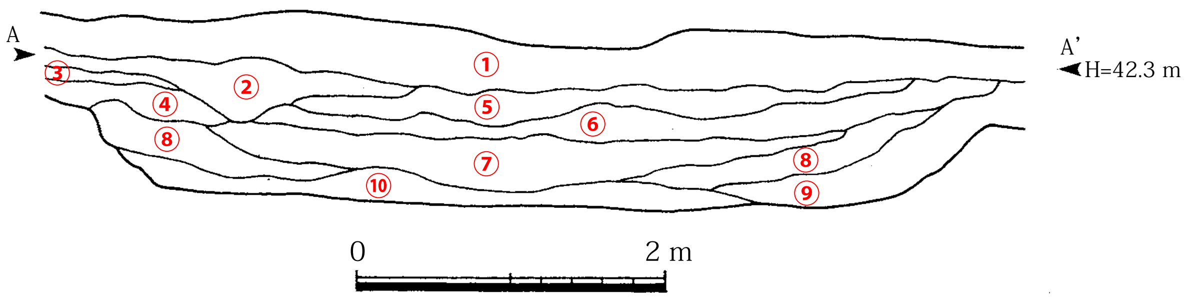


（『ふびと』32号より）

保子里１～３号墳実測図およびトレンチ配置図 (1/1,000)



保子里 1.・3 号墳遺構配置図 (1/300)



周溝 SD14・1 トレンチ東壁実測図 (1/50)

保子里９号墳　保子里５号墳から南東に 70 m離れた県道鈴鹿・亀山線近くに所在します。周囲を耕作によって削り取られ，５m四方で高さ１mの台状となって残存していました。周溝を検出し規模を確認しておくため東・北・西の三方にトレンチを設定しました。

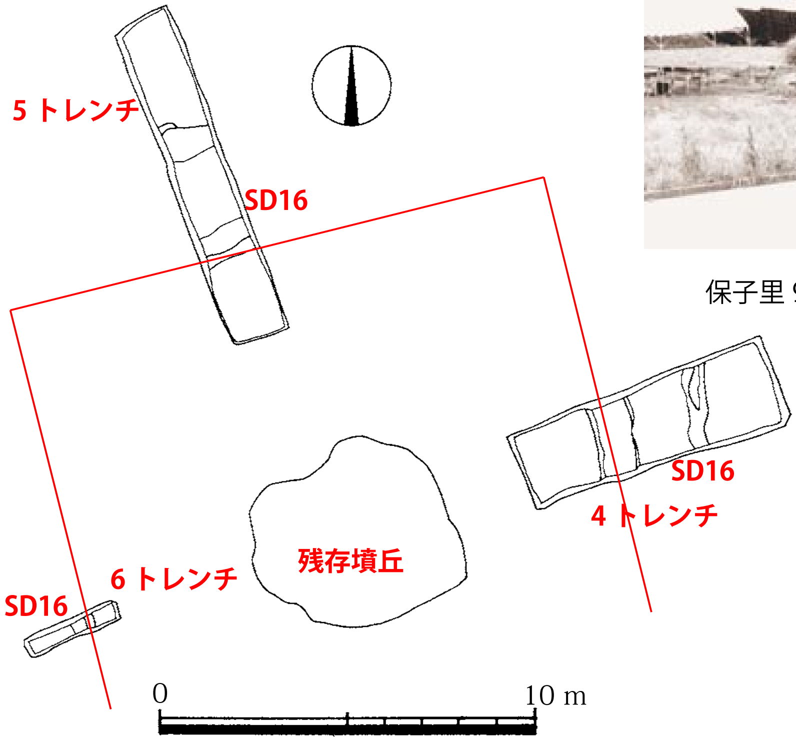
周溝 SD16　東側の４トレンチでは残存墳丘裾から 4.5 m離れて検出されました。幅３m，深さ 0.4 mを測ります。底部から須恵器壺がつぶれた状態で出土しました。北側の第５トレンチでは，墳丘裾から６m離れて検出されました。幅 3.5 m，深さ 0.4 mを測ります。西側の６トレンチでは墳丘裾から 4.5 m離れて検出され , 幅は２m以上，深さ 0.4 mを測ります。いずれの溝のラインも直線的であり，３号墳は一辺約 14 mの方墳であったと考えられます。

まとめ

本調査区からは，古墳時代後期，６世紀前半から中頃にかけての 11 基からなる土壙墓群が検出されました。群内にも SX01 ～ 04，05 ～ 09 といったまとまりが見て取れます。SX01 ～ 04 はそれぞれ 5•8 号墳の周溝を意識して平行•直交の位置関係をとり，それぞれの関係は不均等であるのに対し，SX05 ～ 09 は５・６号墳間のある点を基にして放射状かつ均等に配置されているように思われます。また，土壙墓であるにもかかわらず，墳丘を有する保子里 13 号墳等よりも豊かな副葬品を持つ SX01 や SX05 が存在することは注目に値します。さらに，同じ土壙墓内でも副葬品の量・質にかなりの内容の差が認められます。このような現象にどのような被葬者の身分・地位・富あるいは性の差が反映されているのか興味深いところです。

保子里１号墳は双円墳と考えられてきましたが，トレンチ調査の結果を見ると少なくとも西墳の周溝は円形にめぐっているようには見えません。もし，方形であるとすれば保子里１号墳は前方後円墳であった可能性も考えられます。また，周溝を共有する形で密接に築かれた方墳２基あるいは方墳と円墳という可能性も考えておかねばなりません。いずれにしても，結論は今後の調査を待つことになります。

保子里９号墳調査前状況 (南から)



保子里９号墳遺構配置図 (1/200)

本調査区全景 (北から)

SX01 ～ SX04・SD13 検出状況 (東から)

SX01(北から)

SX02・SX03(東から)

SX04(西から)

SX05(南から)

SX06(北から)

SX06 完掘 (西から)

SX07(西から)

SX08(南西から)

SX09(南東から)

SX10・11(南から)

1 トレンチ・SD14(北から)

2 トレンチ・SD14(北から)

3 トレンチ・SD15(東から)

現在の保子里 1 号墳 (北から)

現在の保子里 9 号墳 (東から)

4 トレンチ・SD16(西から)

5 トレンチ・SD16(南から)

6 トレンチ・SD16(東から)

SX01 出土土師器・須恵器・鉄刀子

SX04 出土須恵器・紡錘車

SX05 出土鉄鏃

SX06 出土土師器・須恵器

SX08 出土須恵器

SX09 出土須恵器・鉄刀子

SX10 出土須恵器

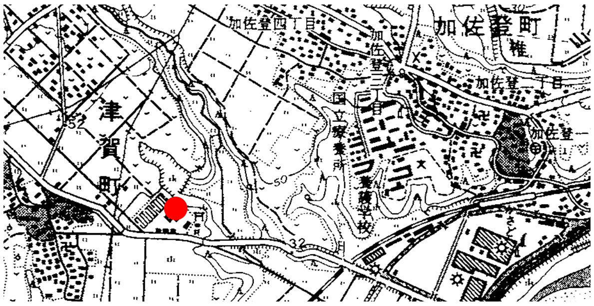
保子里 1 号墳 SD14 出土円筒埴輪

保子里 3 号墳 SD15 出土鉄鏃

保子里 9 号墳 SD16 出土須恵器

津賀平遺跡　Tsugahira site

所 在 地　鈴鹿市津賀町字五反田
事業主体　鈴鹿農業共同組合
調査目的　カントリーエレベーター建設に先立つ
　　　　　埋蔵文化財の記録保存
調査期間　平成元年９月８日～９月 30 日
調査面積　700 ㎡
調査主体　鈴鹿市遺跡調査会
調査担当　藤原秀樹・新田　剛



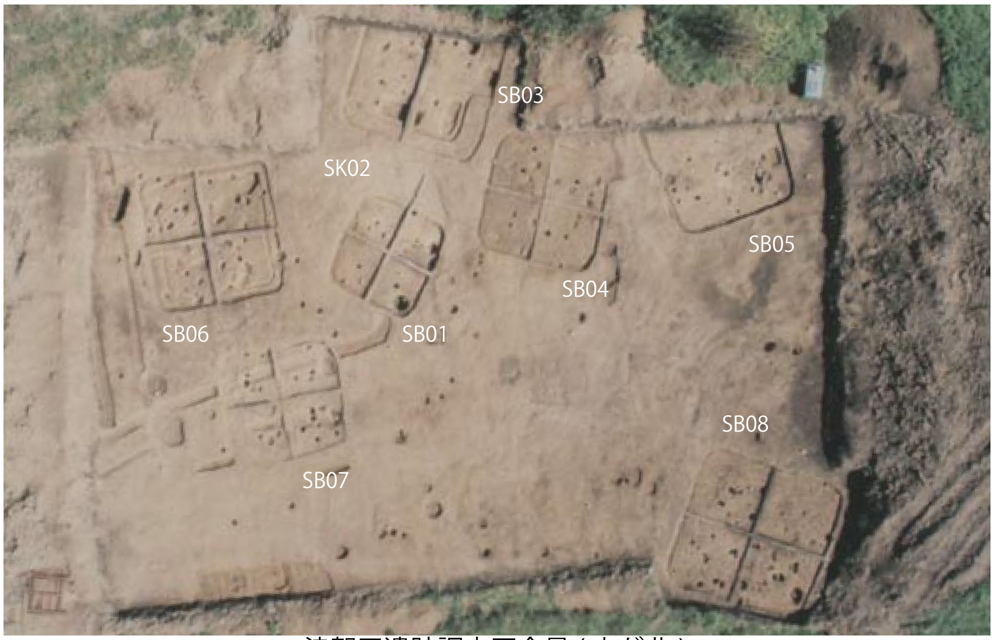
津賀平遺跡調査位置図 (1/25,000)

津賀平(つがひら)遺跡は鈴鹿川左岸の標高 45 m前後の段丘（旧扇状地）上です。この台地は，東は鈴鹿川に浸食されて 20 mほどの急崖をなし，南北には浸食谷が入り込んでいます。今回の調査区は遺跡の北縁にあたり，北に谷を望む台地の縁辺部です。

調査は農業用施設建設に先立って実施されました，事前に行った試掘の結果，カントリーエレベーター本体基礎により破壊される範囲で遺構が確認されたため，約 700 ㎡について本調査を実施することになりました。

調査の結果，7 棟の竪穴住居を検出しました。いずれも掘り方は正方形で，壁際には壁溝をめぐらせ，4 本の主柱で屋根を支える構造のものです。最大のものは SB08 で一辺が 6.6 m，最小のものは SB01 で一辺 4.5 mあります。SB03 と SB06 では同一場所で掘り方の大きさを変えて建て替えが行われています。また，SB04・SB07・SB08 では主柱穴が重複していて，同じ掘り方のまま上部の改築が行われたことがうかがえます。まだ作り付けのカマドは出現しておらず，SB03・SB04・SB06 で床面中央の一部が焼けた地焼炉の痕跡が見られます。また，ほとんどの住居が東側の壁際かコーナー部に円形の土坑（貯蔵穴）を持っています。その中で SB03 のみが壁沿いに長方形の土坑３基を伴っていてやや特殊です。SB01 の土坑からは甕や鉢などがまとまって，SB08 の土坑からは粘土の塊が出土しました。

竪穴から出土した遺物はほとんどが土器で，高坏・器台・壺・ヒサゴ壺・甕・台付甕・鉢・有孔鉢 (甑) 等があります。あとは砥石が出土しています。大部分は元屋敷式と呼ばれる古墳時代でも古い



津賀平遺跡調査区全景 (上が北)

段階の土師器に位置づけられ，一部は弥生時代後期に遡るものも見られます。

その他の遺構としては，一辺 3.3 mの方形の土坑 SK02 があり，山茶碗が出土して鎌倉時代のものと見られます。また，溝が３条検出されましたが，近世陶器片が出土し農道の側溝とみられます。

津賀平遺跡は，弥生時代終末から古墳時代初頭という限られた時期に営まれた集落が確認できました。700 ㎡という限られた調査面積からみれば竪穴住居の分布密度は濃いといえるでしょう。台地の縁辺部にはさらに多くの住居が存在すると考えられます。

【参考文献】　藤原秀樹 2003「津賀平遺跡」『鈴鹿市考古博物館年報４』鈴鹿市教育委員会

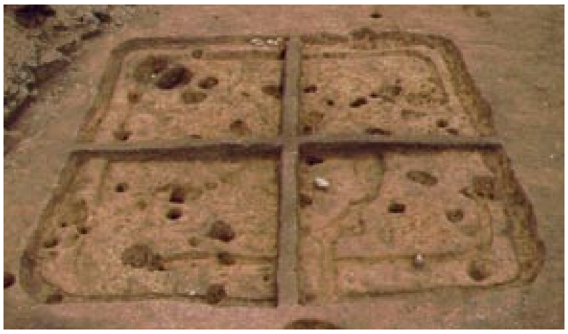
SB01

SB01 貯蔵穴

SB03

SB04

SB05


SB06

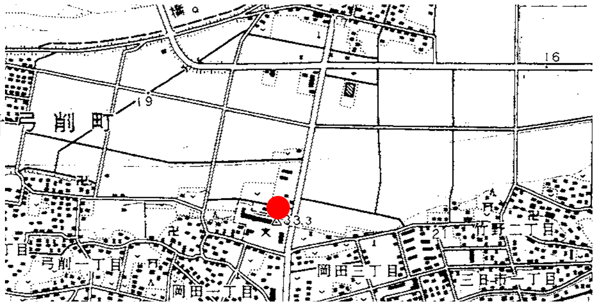
SB07

SB08

SB08 貯蔵穴

岡田遺跡　Okada site

所 在 地　鈴鹿市岡田町字吉原
事業主体　鈴鹿市
調査目的　市立牧田幼稚園建設に先立つ埋蔵文化財の記録保存
調査期間　平成元年８月21日～９月16日
調査面積　400 ㎡
調査主体　鈴鹿市遺跡調査会
調査担当　藤原秀樹・新田　剛



岡田遺跡調査位置図 (1/25,000)

はじめに

岡田遺跡は鈴鹿川右岸の低位段丘に接した水田中の微高地に立地します。この微高地は標高約 19 mで，南側の段丘面からは２ｍ低く，北側の谷底平野からは 1m ほど高くなっています。おそらく，鈴鹿川が大氾濫した際に，段丘の末端が削られ切り離されたことによって生じたものと思われます。現在は大部分が水田化され，畑として高まりをとどめる範囲はごくわずかです。

調査地は，岡田遺跡の南辺にあたります。この範囲は微高地と低位段丘端に挟まれた低地で，段丘端からの湧水が豊富です。調査は，幼稚園舎の建設に先立つもので，建物の基礎部分を対象としました。

調査の結果

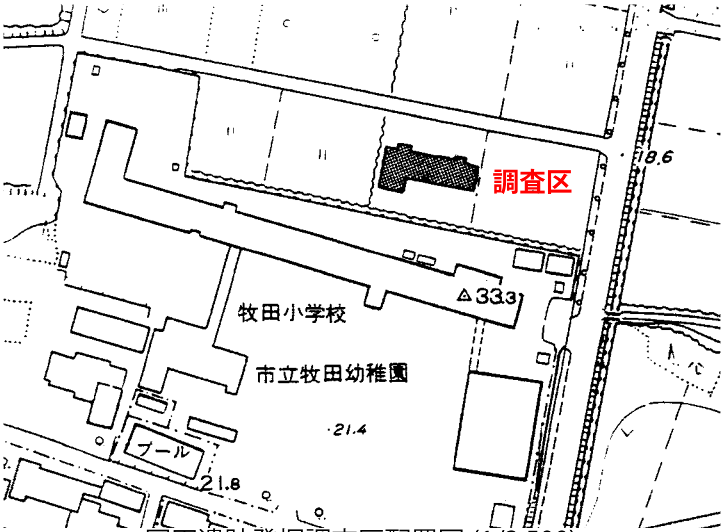
耕作土と床土を除去すると，厚さ 0.1 ～ 0.15 mの黒褐色土の包含層が広がっています。大部分の出土遺物はこの層から出土しました包含層を除去すると，黄白色粘質シルトの基盤層が表れ，この表面で遺構検出を行いました。検出した遺構は土坑 12 基，溝 1 条。ピット約 90 基です。

土坑 SK01 ～ 05　調査区南西で検出されました。幅約 1.5 m，長さ 2.5～3.0 mの不正な長方形を呈する土坑が密集しています。SK01 ～ 03 のように順次位置をずらせながら掘られたものもあります。いずれも検出面からの深さは 0.05 m程度です。

土坑 SK06　径 1.1 m，深さ 0.1 mの円形土坑です。

土坑 SK07　径 1.5 m，深さ 0.05 m の不正な円形土坑です。

土坑 SK08・09　SK08 は南北 1 m，東西 0.8 m，深さ 0.1 mの長方形の土坑です。SK09 は SK08 に切られる不整な方形の土坑です。柱穴掘り方様で



岡田遺跡発掘調査区配置図 (1/2.500)

岡田遺跡発掘調査区全景 (南から)

すが対応する柱穴が見つかりませんでした。

土坑 SK10　東西 1.3 m，南北 1.1 m，深さ 0.1 mの円形土坑です。

土坑 SK11　一辺 0.9 mの方形土坑です。

土坑 SK12　南北 0.9 m，深さ 0.15 mで東西に長い楕円形土坑です。周辺は遺構検出面である基盤層の高さが 0.2 〜 0.3 m高く，このあたりから北側は微高地へと移行していることがわかります。

溝 SD13　幅 4 m，延長約 5 mを検出しました。痕跡状に残る，まっすぐな溝です。

柱穴列 SA(SB)14　ピットの中で比較的並びが均整なもの３間分を SA(SB)01 としました。柱間は約 1.5 m (5 尺) とみられます。他は，うまく建物や柵列としてまとまりませんでした。

出土遺物は，整理箱で 13 箱と多く出土しました。磨製石斧，弥生土器，土師器，須恵器，土馬，緑釉陶器，灰釉陶器，山茶碗，青磁，白磁，土師質土器，常滑焼と縄文時代晩期から鎌倉時代までの各時代の遺物が出土しています。しかし，遺物はほとんどが包含層から出土し，多くが細片かつローリングを受けていて，接合・復元できるものはわずかです。

まとめ

調査区は過去の耕地整理や耕作によってかなり削平，撹乱されていましたが，土坑・ピットを検出しました。遺構出土遺物に少なからず山茶碗が混在していることから，少なくともこれらの遺構の年代は平安時代後期〜鎌倉時代に下るのではないかと考えられます。現在でもかなり湿潤な状態であるので集落というより，水田として利用されていた可能性が考えられます。平成 6 年に調査された竹野一丁目遺跡においてもよく似た立地において中世の水田に伴って浅い方形土坑状遺構がいくつも見つかっています。岡田遺跡の土坑群も，同様に肥を鋤きこむなどした耕作痕であるかもしれません。その他のピットも建物の柱としてはまとまりが無いので稲架などの施設ではないかと見られます。

それ以外の幅広い年代にわたる多量かつさまざまな遺物の堆積は，南側の低位段丘上および北側の微高地を利用して各時期の集落が営まれ，不要となった土器等が低湿地に投棄されたことによって形成されたと考えられます。

中でも，400 ㎡という狭い範囲の調査にもかかわらず高級品として通常寺院・官衙で出土することが多い緑釉陶器が 6 点出土していること，祭祀具である土馬が出土していることが注目されます。奈良・平安時代頃，河岸段丘の縁辺部に立地した集落にとってこのあたりは重要な水場であり，いわゆる水辺の祭祀が行われる場であった可能性が高いと思われます。

SK01 〜 SK06(東から)

幼稚園 PTA も参加しての発掘作業 (東から)

SA(SB)14 柱穴列 (東から)

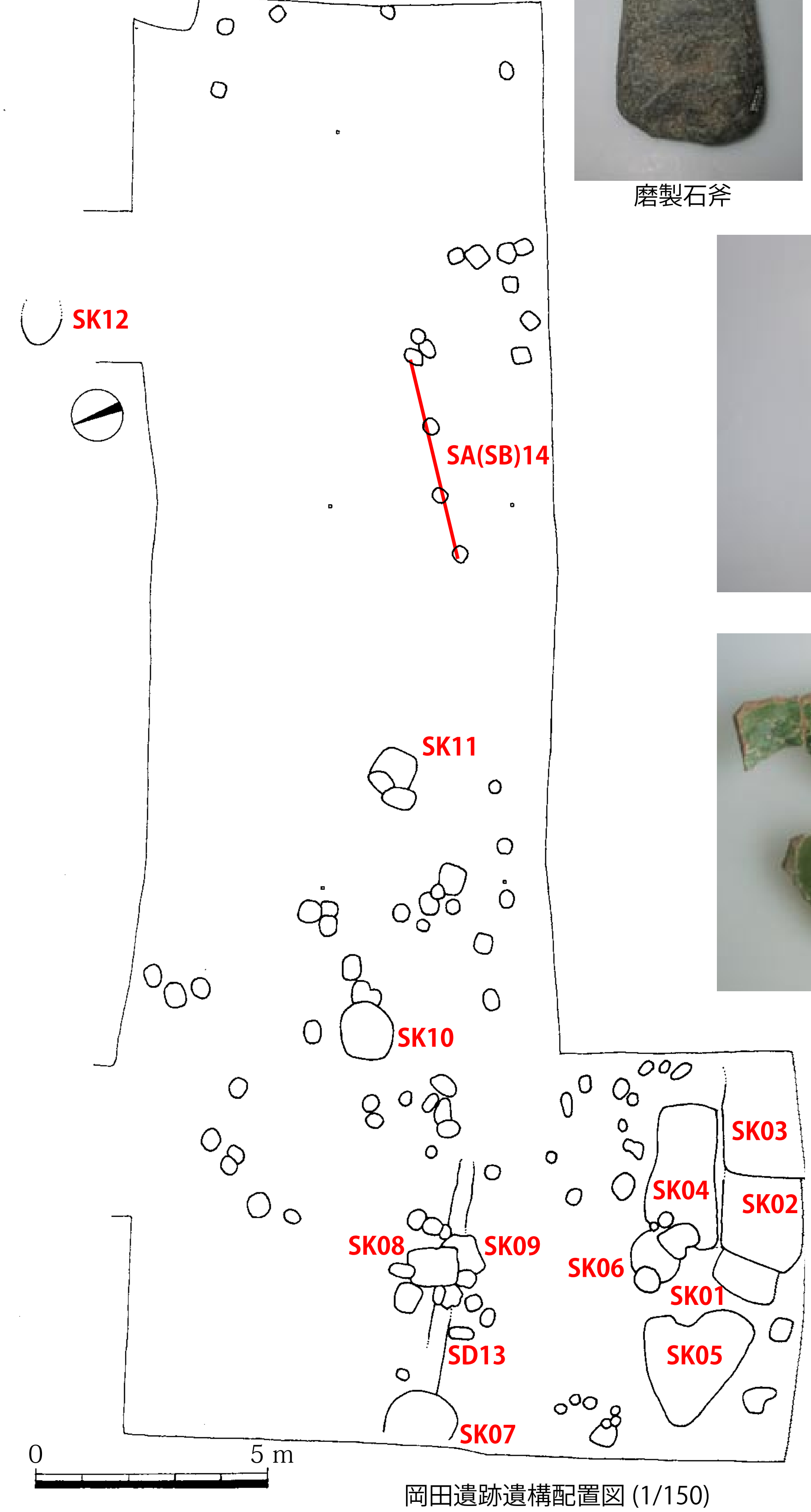
磨製石斧

須恵器坏

土馬脚部

緑釉陶器

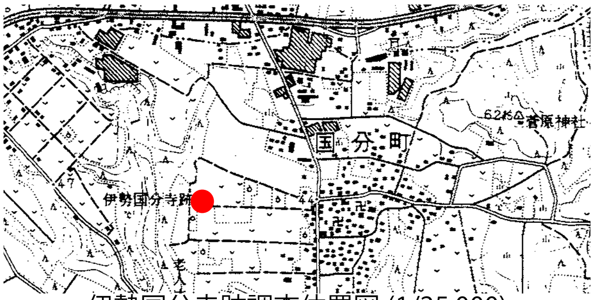
白磁・青磁



岡田遺跡遺構配置図 (1/150)

伊勢国分寺跡 (2 次)　Ise Kokubun-ji site

所 在 地　鈴鹿市国分町字堂跡・西谷・西高木
事業主体　鈴鹿市
調査目的　学術調査
調査期間　平成元年 10 月 2 日～ 12 月 19 日
調査面積　470 ㎡
調査主体　鈴鹿市教育委員会
調査担当　中森成行・藤原秀樹・新田　剛



伊勢国分寺跡調査位置図 (1/25,000)

国史跡伊勢国分寺跡の寺域 (伽藍（がらん）地) 範囲確認調査の二年目になります。第 1 次調査において西辺築地（ついじ）の外溝が確認され，史跡指定の線がほぼ西辺築地跡を踏襲していることが分かっています。

今回の調査では，史跡の現状変更願いを提出して史跡指定地内まで調査区を広げました。まず，南辺築地を確認するために西高木 1・堂跡 6 トレンチを，北西隅を確認するために西谷 3 を，北東隅を確認するために堂跡 2 ～ 5 トレンチを設けました。

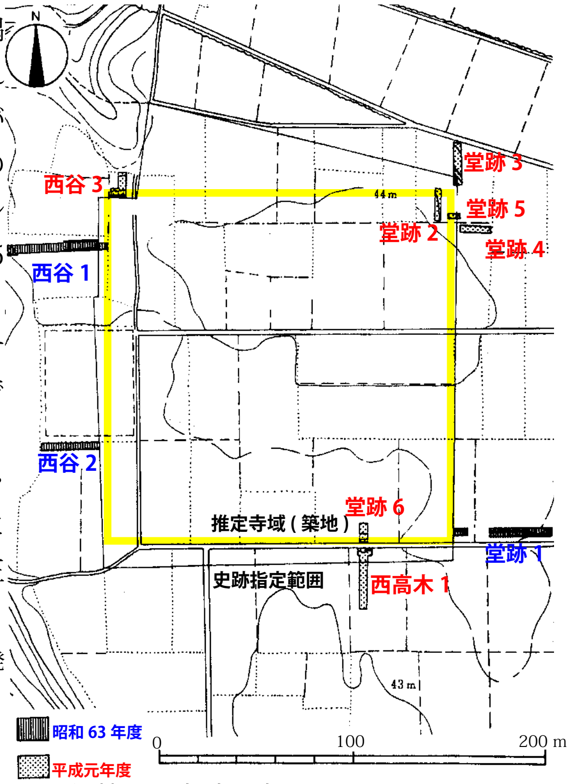
西高木 1 トレンチでは南辺築地外周溝と見られる深さ約 0.1 ～ 0.5m の東西溝が検出されました。その他，この溝を切る瓦片の詰まった土坑を検出しました。トレンチ南側では小ピットが多数検出されています。堂跡 6 トレンチでも南辺築地内周溝と考えられる深約 0.5m の東西溝が検出されました。溝は最近 の撹乱土坑により破壊され幅は不明でした。築地の基底は農道と重なるため，残念ながら幅もはっきりしませんでした。

西谷 3 トレンチでは，南から北築地外周溝と考えられる幅約 2m，深さ約 0.5m の東西溝が検出されました。溝の下層においては完形に近い瓦も多く見られました。その他，東西溝を切る土坑などが検出されました。

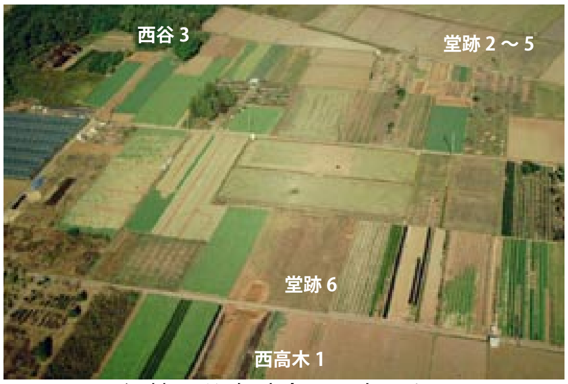
堂跡 2 ～ 5 の 4 トレンチでは，堂跡 2 トレンチからは東築地の内周溝と考えられる深さ約 0.6m の南北溝が検出されました。しかし，重複して掘り込まれている後世の溝のため築地基壇の端は明らかにできませんでした。堂跡 3 トレンチの南西隅からは，築地外周溝の北東隅と見られる溝が検出されました。埋土からは瓦片に混ざって須恵器瓶子などがまとまって出土しました。調査区北側では中世以降の溝なども検出されています。ちょうど堂跡 2・3 トレンチの間に築地の北東隅が位置するようです。堂跡 5 トレンチからは東築地外周溝と考えられる幅約 3.5m，深さ約 0.6m の溝が検出されました。堂跡 4 トレンチからは平安末～中世のピットや溝が検出されたのみです。

これまでの調査の結果, 伊勢国分寺跡の規模が東西・南北約 180m（600 尺）であることと，大正 11 年に指定された範囲が北辺を除く外周築地の線を比較的正確に踏襲していることが確認できました。

【参考文献】　藤原秀樹・新田　剛 1990『伊勢国分寺跡―第 2 次発掘調査概要―』鈴鹿市教育委員会



伊勢国分寺跡調査区配置図 (1/4,000)



伊勢国分寺跡全景 (南から)

西谷 3 トレンチ (東から)

堂跡 6・西高木 1 トレンチ (北から)

堂跡 2 トレンチ (北から)

堂跡 3 トレンチ (北から)

堂跡 3 トレンチ
築地外溝北東隅

堂跡 4 トレンチ (北から)

堂跡 5 トレンチ (東から)

須恵器瓶子

軒丸瓦

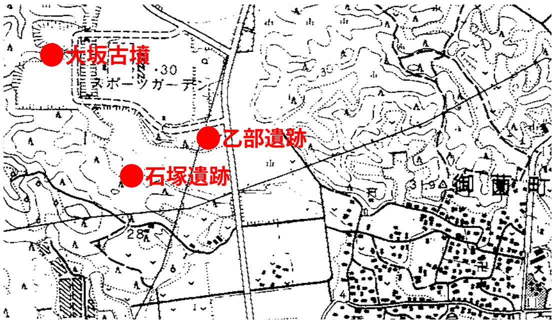
灰釉陶器段皿

軒平瓦

押印瓦

石塚遺跡・乙部遺跡・大坂古墳

Ishiduka site ・ Otobe site ・ Osaka Tumulus



石塚遺跡ほか発掘位置図 (1/25,000)

所 在 地　鈴鹿市御薗町字石塚・乙部・大坂
事業主体　三重県
調査目的　スポーツガーデン建設に先立つ埋蔵文化財の確認調査
調査期間　平成元年 12 月 18 日～平成 2 年 1 月 23 日
調査面積　250 ㎡
調査主体　鈴鹿市遺跡調査会
調査担当　藤原秀樹

中ノ川の左岸には，標高 60 m前後の鈴鹿西南部丘陵地が広がっています。この丘陵地は中ノ川から派生した小支谷によっていちじるしく浸食されて複雑な樹枝状を呈しています。中ノ川の支流である井出川流域の丘陵地に県営スポーツガーデンの造成計画が立てられ，これに先立って埋蔵文化財の有無確認調査を行いました。

事業予定範囲内には，周知の遺跡として大坂古墳（直径 10 m，高さ 1 mの円墳）と乙部遺跡（土師器・須恵器の散布地）が登録されていました。大坂古墳では，墳頂部に 1 ヶ所，裾に 2 ヶ所トレンチを設定しましたが，いずれも表土の下はすぐ基盤層の岩盤でした。自然地形が，開墾の際に周囲を整えられて古墳状をなしていたようです。他にも，事業地内をくまなく踏査して，尾根上の古墳状の高まり 6 ヶ所についてトレンチ調査しましたがいずれも自然地形でした。

乙部遺跡は，遺跡地図では井出川に向かって突き出した尾根先端の東・北向き斜面とされていましたが，踏査の結果，この斜面は開墾によって削られ旧地表はほとんど失われ，遺物の散布も見られませんでした。また，丘陵裾のトレンチ調査でも遺構・遺物が確認されませんでした。しかし，ひとつ谷を挟んだ南側の尾根の先端部で須恵器片の散布が認められたほか，加工されたチャートの剥片やサヌカイト剥片が採集され，新たに旧石器時代に遡る遺跡であることがわかりました。遺跡地図の位置は誤りで，本来の遺跡はこちらであったようです。

石塚遺跡は開発予定地の南西部，新しく確認された乙部遺跡とはさらに谷を挟んで南側に位置します。北向きの緩やかな丘陵斜面の端部で，踏査の際に農道わきに埴輪片が散布していたことにより新たに発見されました。トレンチ調査の結果，南北 2.7 m，東西 6.3 m，深さ 0.2 mの隅丸長方形の土坑が確認されました。土坑の周囲には幅 1 mほどの平坦面が削りだされています。土坑内には炭・焼土・埴輪片・土師器片を含む層と，黄白色の砂質土とが薄い互層をなして堆積していました。また，さらに南側の丘陵上部においても埴輪片を含む土坑 2 基を確認しました。出土遺物には，円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（蓋（きぬがさ）・楯（たて）・家）・土師器壺・高杯・甕があります。出土した埴輪は生焼けでもろく，また野焼きで焼かれた際にできるとされる黒班が見られます。土坑の炭や焼土の堆積状況と埴輪の状態からみて，この土坑は埴輪を野焼きするためのものであった可能性が高いと考えられます。

埴輪は 5 世紀後半には須恵器と同様に窖窯で焼かれるようになりますが，それにさかのぼる野焼きの施設は，香川県中間西井坪遺跡と奈良県平城宮跡東院地区の 2 遺跡でしか発見されておらず大変貴重な資料といえます。また，石塚遺跡で焼かれた埴輪と類似する埴輪が使用された古墳は見つかっていないことから，まだ市内に未発見の中期古墳が残されている可能性があります。

【参考文献】　藤原秀樹 1994 「石塚埴輪製作遺跡について」『第 4 回鈴鹿市埋蔵文化財展～最近の調査から～』鈴鹿市教育委員会

埴輪焼成土坑 (北から)

埴輪焼成土坑 (東から)

土坑検出状況 (北から)

加工痕のあるチャート剥片･サヌカイト剥片 (右)

円筒埴輪

蓋形埴輪

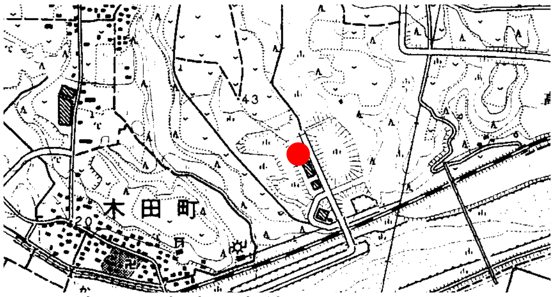
盾形埴輪

家形埴輪

土師器壺

中尾山遺跡　Nakaoyama site

所 在 地　鈴鹿市国分町字中尾山
事業主体　鈴鹿市
調査目的　不燃物最終処分場建設に伴う埋蔵文化財の記録保存
調査期間　平成元年 12 月 21 日～平成 2 年 3 月 31 日
調査面積　3,000 ㎡
調査主体　鈴鹿市遺跡調査会
調査担当　新田　剛



中尾山遺跡調査位置図 (1/25,000)

鈴鹿川左岸の鈴鹿川に向かって細長く突き出した舌状台地上に位置します。高岡町から国分町にかけての鈴鹿川左岸の台地上は全域が遺跡といってもいいほど遺跡の分布密度が濃い地域です。中尾山遺跡も古墳時代から中世にかけての遺物散布地として知られていました。また，開墾により墳丘はすべて破壊・消滅してしまいましたが，13 基が存在していたという中尾山古墳群が分布しています。

調査は，この舌状台地の先端部が不燃物最終処分場の建設により削平されるため実施されます。年末に調査に着手し，年内は樹木抜開・表土除去等の準備作業のみであったため，発掘調査成果については「発掘された鈴鹿 1990」において報告します

遺構検出作業風景

方形周溝墓 SX06 検出状況

竪穴住居 SB01・方形周溝墓 SX01 検出状況

報告書抄録

ふりがな	はっくつされたすずか１９８９
書名	発掘された鈴鹿１９８９
副書名	発掘調査概報・概要集
巻次	
シリーズ名	発掘された鈴鹿
シリーズ番号	
編著者名	藤原秀樹
編集機関	鈴鹿市考古博物館
所在地	三重県鈴鹿市国分町２２４
発行年月日	平成 15 年 7 月 5 日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
保子里遺跡 保子里古墳群	鈴鹿市国府町 字井口・保子里	24207	1067，180 182，184 187，188	34° 51′ 30″	136° 29′ 44″	890522 ～ 890607	350	モータープール造成
岡田遺跡	鈴鹿市岡田町 字吉原	24107	385	34° 52′ 55″	136° 32′ 54″	890821 ～ 890916	400	幼稚園舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
保子里遺跡 保子里古墳群	古墳群	古墳	古墳周溝・土壙墓	須恵器･土師器･紡錘車・鉄刀子・鉄鏃 円筒埴輪・朝顔形埴輪	土壙墓 11 基を検出
岡田遺跡	集落	縄文・弥生 古墳・奈良 平安・鎌倉	土坑・溝・ピット	磨製石斧･弥生土器・土師器・須恵器 土馬・緑釉陶器・灰釉陶器 山茶碗・白磁・青磁・常滑焼	

編集環境

Windows XP Home Edition

Adobe InDesign2.02j

Adobe Photoshop LE

使用フォント

小塚ゴシック std・小塚明朝 std

発掘された鈴鹿 1989 発掘調査概報・概要集

発　　行　平成 15(2003) 年 7 月 5 日

編集発行　鈴鹿市考古博物館

〒 513-0013　三重県鈴鹿市国分町 224

TEL0593-74-1994　FAX0593-74-0986

E-mail:kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp

URL　http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/